

『権威についての問答』

聖書 マタイによる福音書 21章 23～27節 讃美歌 17 355

説教 森田幸男牧師

私たちは今日も一緒に聖書を読むのでありますが、私たちが聖書を読むのは何のためでしょうか。それは平安を得るため、慰めを得るため、自由を得るため、そのように答えれば、皆さんの答えはこの中に含まれるでしょうか。勿論これ以外にもいろんなことを思って読む方があります。クリスチャンであっても商売繁盛のために聖書からヒントを得るといふふうなことで読む人も少なくありません。しかし今申しました平安、慰め、自由を得るためにというのは、抽象的のようで、恐らく私たちのいるいな求めはこの中に入っていると思います。しかしその平安、慰め、自由は、生きる時も死ぬ時も、この肉体にとって魂にとって、そしてこの地上だけではなくて天においてもの平安、慰め、自由を得るために私たちは聖書を読むのだと、このように言うことが出来るのではないのでしょうか。

そして聖書は私たちにそれを与えてくれると思います。そうなのですけれども、私は今日の箇所を読んでおりました、聖書を読むということは怖いことだと思いました。そのことにも今、聖書を見ながら触れたいと思います。

今日の箇所は、イエス様が神殿において教えておられた時に、祭司長や民の長老たちが近寄って来て、権威についての問答がなされたという内容であります。ここに、祭司長や長老たちとありますが、並行記事のマルコによる福音書 11章やルカによる福音書 20章では、律法学者がその間に入っております。このように祭司長、律法学者、民の長老たちとこのように言えば、いわゆるユダヤの最高議会、サンヒドリンと言いますが、その70人議会のメンバーたちであります。時は過越祭ということでもありますから、彼らは皆、このエルサレムに集っていたのであります。

今日の箇所は実は既に読んだ 21章 12節～17節に記されている、いわゆる「宮清め」の記事に続く話であります。その「宮清め」というのはキリストの生涯の最後の週の日曜日の出来事でありました。人々が、イエス様を神から遣わされた預言者、否、預言者以上のメシア・救い主として歓迎した様子は、宮清めの前に、いわゆる「エルサレム入場」のところに記されている事であります。そのイエス・キリストが神殿の境内において「宮清め」を行われたのであります。そしてキリストは、「あなたがたはすべての人の祈りの家を強盗の巣にしている」と、神殿祭儀に対し非常に厳しい糾弾をされて、神殿の境内で売り買いしている人々を皆追い出し、両替人の台や鳩を売る者の腰掛を倒されたということが記されておりました。

15 節を見ますと、これを聞いた祭司長たちや律法学者たちが飛んで来まして、この乱暴狼藉に対して嚴重抗議をするわけであります。先ほど申しましたように祭司長、律法学者が(民の長老がここでは抜けておりますが)要するに民の指導者たちがやって来たわけであります。彼らの大事な務めは、預言者と偽りの預言者を見分けて偽りの預言者を排除して、真の神の言葉を語る預言者をして民の指導者とすることのであります。その祭司長、律法学者、民の長老たちがやって来て抗議したということは、彼らがイエス・キリストの言動を預言者のものとは認めなかったということであります。彼らは抗議したので、もうこれで二度と同じようなことは繰り返すまいと思ったことでありましょう。そしてその日イエス様はベタニア村に出ていかれた。しかし、翌日またエルサレムにやって来られた。そして今日の箇所へと来るわけであります。

そしてイエス様が神殿の境内に入って教えておられると、祭司長や民の長老たちが寄って来て言います。「何の権威でこのようなことをしているのか。だれがその権威を与えたのか」と言って迫ります。それに対してイエス様は、「では、わたしも一つ尋ねる。それに答えるなら、わたしも、何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。ヨハネの洗礼はどこからのものだったか。天からのものか、それとも、人からのものか。」このようにイエス様は尋ねられました。この洗礼を授けていたヨハネは最後の預言者と言われる人でありまして、彼の活動についてはマタイによる福音書 3 章全体において既に述べられております。エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から人々がヨハネの下にやって来た。そしてファリサイ派やサドカイ派の人々もヨハネの語るところを受け入れて、洗礼を受けた。イエス様も受けられたということがここに書かれています。ということは、人々はこのヨハネを神から遣わされた預言者と認めていたわけであります。

ヨハネについては更に覚えておくべきことがあります。旧約聖書の最後の書は「マラキ書」であります。その書の最後のところ、つまり新約聖書の直前に神様のお言葉が書かれております。3 章 23 節です。「見よ、わたしは / 大いなる恐るべき主の日が来る前に / 預言者エリヤをあなたたちに遣わす。 / 彼は父の心を子に / 子の心を父に向けさせる。 / わたしが来て、破滅をもって / この地を撃つことがないように。」

このようにして神様は最後の裁きの日に先立って預言者エリヤ、或いはエリヤ的な預言者を遣わすと、このように言っておられるのであります。こういう背景がありまして、イエス様はヨハネについて語っておられるのが、マタイによる福音書 11 章 14 節にあります。11 章の 2 節からは洗礼者ヨハネとイエス様を比べているところがありますが 14 節に、「あなたがたが認めようとすれば分かることだが、実は、彼は現れるはずのエリヤである」とイエス様は洗礼者ヨハネのことを、「神様が裁きの日にメシアを遣わすその前に派遣するところのエリヤなのだ」と言っておられるのです。そして人々はこのヨハネの下に行き、悔い改めて、洗礼を受けたということでありました。

こういう事実を踏まえてイエス様は、「わたしも一つ尋ねる。それに答えるなら、わたしも何の権威でこのようなことをするのか、あなたたちに言おう。ヨハネの洗礼はどこからのものだったか。天からのものか。それとも、人からのものか。」つまり、ヨハネはどういう権威をもってあのような活動をしたのか。そして多くの人々はそれを神から与えられた預言者のものと認めて彼から洗礼を受けたけれども、あなたがたはそのヨハネをどう思うか。彼は天からのものか、それとも人からのものか、とイエス様は問われたのであります。すると、彼らは論じ合ったと今日の25節に書いてあります。即答ができないということですね。祭司長、律法学者、長老たちの主だった者が来ているのですが、彼らには思いがけないイエス様のこの反問を受けて、彼らはどうやっていいものか分からないでいるわけです。そして「天からのものだ」と、つまりヨハネを預言者として認めると言えば、「では何故、あなたがたはヨハネを信じなかったのか。彼の言葉を受け入れなかったのか」と言うだろう。また、「人からのものだ」と言えば、皆がヨハネを預言者と思っているから群衆が怖い。このようなことで彼らは「天から」とも言えないし、「人から」とも言えない。逆に、窮地に陥ったわけでありまして。そこで彼らは、「分からない」と答えを濁したのであります。「彼は預言者ではない。偽預言者だ。そして、お前もそうだ」と本当は言いたかったのですが、そう言うと、それこそ群衆が怖い。群衆はヨハネを認め、また、イエス様をヨハネ以上のものとして認めているので、それを否定しようものならこの大事な過越祭の中で暴動が起きるかもしれない。だから彼らは本当は一刻も早く捕らえて処罰したいわけですが、過越祭の間だけはさげようと。そうでないと本当に收拾がつかなくなるからということが26章5節に出ています。そんなこんないろいろなことを思いやっけて、彼らは「分からない」と答えて逃げたわけです。

するとイエス様も、「それなら、何の権威でこのようなことをするのか、わたしも言うまい」と言われました。勿論、洗礼者ヨハネのことを出されて、「わたしは神から遣わされて、その神の御心を行い、その御言葉を語っているのだ」というのがイエス様の答えであります。

先ほど申しましたが祭司長、律法学者、民の長老たちは、民を指導する責任がありますから、宗教的、政治的秩序を守らなければならない。そして既に暴露されたように、自分たちの権益も守ろうとするのであります。でも今日のこのやり取りを見ますと、彼らは本当に神様を信じ、畏れているのではないことがはっきりします。元々このような秩序も神殿の事なども神の導きの中で出来ていったものには違いないわけですが、今やそれは祈りの家ではなくて強盗の巣になってしまっている。これは変えなければいけないわけですが、それにはいつの間にか彼らの身についた権益も付いていますから、これをくつがえさせられると自分たちの立場がないということで、それをただ守ろうとするわけです。そしてイエス様から問われると、「分からない」と答える。神を恐れなくて人の顔色をうかがう、いわゆる日和見主義者であります。

このような聖書を読んでおりました、聖書は私たちに何を語るのか。単なる平安とか慰めとか自由、そのようなものを与えてはくれない。むしろ厳しく、「あなたは何を恐れ、何を権威とし、生きる時死ぬ時の、また肉体のみならず、魂にとっても、この地上ばかりか天においても、何をあなたの本当の拠りどころとしているのか？」そういうことを私たちは厳しく問われる思いがいたします。

そして結局、私たちはこのイエス・キリストをだれと言うのか？ どのような方と言うのか？ どのような意味でイエス・キリストは救い主であると言うのか？ そういうことを私たちはこの聖書を読むことを通して問われているのであります。そしてこのユダヤの最高の指導者たち、祭司長、律法学者、民の長老たちは、「分かりません」と言ったのであります。私たちはどう答えるのでしょうか。正に生活の只中で、「あなたはイエス・キリストをだれと言うのですか？」この問いに答えて、そして生きることが私たちの信仰生活なのです。これは単なる慰めや平安というのではないのであります。真の慰め、平安、自由は、神への恐れの中にあるのであります。

最後に、既に読んできたところでありますが、このマタイによる福音書 10 章 26 節以下を読んで終わりにしたいと思います。

「人々を恐れてはならない。覆われているもので現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはないからである。わたしが暗闇であなたがたに言うことを、明るみで言いなさい。耳打ちされたことを、屋根の上で言い広めなさい。体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい。二羽の雀が一アサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、あなたがたの父のお許しがなければ、地に落ちることはない。あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。だから、恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

お祈りいたします。

主イエス・キリストの父なる神様。

あなたは、私たちの肉体も魂も、生きる時も死ぬ時も、地においても天においても、限りない憐れみをもって捉え、導いていてくださることを覚えます。しかし私たちの思いは、今聖書に見たこの指導者たちのように、自らをただ守ること、そのようなことの故に、彼らは自らの歩みを誤り、また、人々を指導することもできず、ただ世俗的な指導者に成り下がっていることを思います。そして私たちもこの聖書に照らされて、これらの人々と変わることはない自らを思い知らされます。

どうか、日々の様々な困難の中にあっても、生けるあなたを信じ、恐れ、その御言葉に聞き従って歩む私たちの信仰生活であらしめてください。

この祈り、イエス様の御名をとおり御前にお捧げいたします。アーメン